現地駐在員 曽田実

スタディツアー 同行レポート

8 月 25 日より 3 週にわたり，3 本のスタディ・ツアーに同行しました。その間の MRE 事業は事務所スタッフやインターンとしてきている小野寺君にまかせっきりになってしまいましたが，それぞれがきっちりと業務を遂行してくれていたので，安心してスタディ・ツアーの同行を楽しむことができました。

今回レポートでは，この 3 本のスタディ・ツアーを振り返ってみようと思います。このスタディ・ツアー参加者は，福岡をはじめとして東京，名古屋などからそれぞれ飛行機に乗り，集まってくれました。皆単独での応募であり，シェムリアップ空港で初顔合わせとなりました。

シェムリアップ国際空港の出口。この場所で皆が出そろい，スタディ・ツアーが始まりました

各回で行程の順番は多少異なりましたが，ツアーでは以下の場所を回りました。

・アキラ地雷博物館

・義足リハビリセンター

・だるま愛育園

・鬼一二三日本語教室

・CMC コーントライ夢中学校

・CMC トゥールポンローみおつくし中学校

・トンレサップ湖

・アンコールワット

・マーケット

【 アキラ地雷博物館 】

ここでは，この博物館に勤務しておられる川広さんという方に館内を案内していただきました。軽快な語り口で，カンボジアがたどってきた歴史，地雷問題，そしてアキラについて詳しく説明してくださいました。

左側奥におられるのが川広さん

カンボジアという国を考える上で，知っておかなければならないこととして「ポルポトによる国民の大量虐殺」そして「内戦による地雷問題」があげられます。これらの問題が内戦終結後久しくたった今もカンボジアの復興に影を落としています。内戦は終わっても，その影響はまだまだ消えていないのです。このことをここでしっかりと学ばせていただきました。

【 義足リハビリセンター 】

このセンターでは，義足・義手が作られる行程や患者さんがそれに慣れるための訓練を見学しました。手足を失う原因は，交通事故や先天性の障害等さまざまありますが，ここカンボジアでは，地雷事故によって手足を失った方が実に多いです。

地雷問題そのものは多くの資料があり，日本でも学ぶことはできますが，日本人にとってはなじみがなく，とかく抽象的な捉えしかできないものです。今回ツアー参加者たちはここで，地雷被害に遭われた方々と直接お会いし，話を聞くことができました。日本人にとって抽象的な問題でしかない「地雷問題」を，被害者の視点からより

具体的に感じ取ることができ，とても貴重な体験になったのではなかったでしょうか。体験を語ってくださった方々には本当に感謝です。

作業場にお邪魔し，義足をつくる様子を見学させてもらいました

地雷被害に遭われた方々と直接お話しさせてもらいました。ちなみに，一番手前は通訳のシボンさん

【 だるま愛育園 】

だるま愛育園はシェムリアップの中心街からほんの少し離れたところにある孤児院です。さまざまな理由で身寄りがなくなった子供たちがここで共同生活をしています。現在ここを切り盛りしているソリカさんが彼らのお母さんとなり，子供たちは皆すくすくと育っています。CMC 以外にもたくさんの日本人ツアー客がここを訪れているらしく，子供たちも日本人のお客さんに慣れている様子でした。子供たちによるステージ発表もあり，楽しませてもらいました。

真ん中でお話をしてくださっているのが，この施設をきりもりしておられるソリカさん

子供たちのステージ発表

最後はツアー参加者も一緒にステージにあがって踊りました

【 鬼一二三日本語教室 】

ここは鬼一二三さんという女性が運営しておられる日本語教室です。狭い路地の奥にひっそりとたたずむ学校ですが，一歩中に入れば，充実した学校の雰囲気が広がっています。ここから多くの優秀な人材が輩出されています。

ツアー参加者が交流したのはほぼ同世代の若者たちで，初めはお互いに照れつつも，すぐに打ち解けあっていました。自分と同世代の若者が一生懸命そして楽しく日本語を学ぶ姿に日本の参加者たちも刺激を受けていました。

またここでは，鬼先生から日本人がカンボジア語を学ぶ上での難しさとカンボジア人が日本語を学ぶ上での難しさについて発音の観点から説明していただきました。

例えば日本語の場合，母音は「あ・い・う・え・お」の 5 種類ですが，カンボジア語は，これに加え，「あ」と「い」の中間というようにさらに細分化された多様な音で構成されています。子音も息を吐く・吐かないで全く違う音として認識されます。日本人にとっては全く同じに聞こえる音も，カンボジア人はその微妙な（カンボジア人にとっては微妙ではないらしい）違いを認識し使い分けています。したがって，発音に関して言えば，日本人のカンボジア語学習者は非常に苦労するのに対して，カンボジア人の日本語学習者はあまり苦労しないとのことです。

一方で，カンボジア人でも聞き分けられない音があるようです。それが「す」と「つ」。この 2 つはカンボジア人にとって同じ音のようです。互いの得手・不得手について考えながら互いの言語を学習ができ，非常にいい交流をさせていただきました。

日本語教室の生徒に交じって授業を受けているところ。教壇に立っておられるのが鬼先生

終始和やかな雰囲気で交流しました

【 コーントライ，トゥールポンローの両中学校 】

ここは，日本語はおろか英語すらまともに通じない環境です。相手は思春期真っ只中の中学生。孤児院の子どもたちとは勝手が違う。最初はお互いにどう切り込んでいいものやら，そもそも言葉も通じないのにどうやってコミュニケーションをとるんだと双方困惑気味でしたが，いったん何かのきっかけを作って切り込めば，反応は返ってくるもの。

対面。皆一様に表情が硬い・・・

最終的には，みんな絵を描いたり，外でサッカーをしたりと，非常に和気あいあいと楽しい雰囲気で交流できていました。中には「旅の指さし会話帳」という強力なアイテムを用意している人もいて，人気を集めていました。こんな時はこういう本が本当に役立ちます。

それも束の間。一言二言言葉を交わせばすぐに打ち解けあえます

カンボジアの男の子はみんなサッカーが大好き。熱い中汗だくになりながらサッカーを楽しみました

さて，この両中学校のまわりには実はまだたくさんの地雷が潜んでいるらしいです。そして，この周辺に地雷被害に遭われた方が多く住んでいるとのこと。今回我々は地雷被害者のお宅にお邪魔して，お話を伺う機会を持ちました。

地雷被害者のお宅。左足を失って以来，仕事はできず，妻や子どもに出稼ぎに行ってもらい，自分は家事をしているとのこと。家の奥に見える草むらにはまだ地雷が眠っているとのこと

地雷被害によってその後の人生を大きく狂わされてしまった人の気持ち，そしてその家族の気持ちに触れ，参加者たちの心にも響くものがあったのではなかったでしょうか。戦争はとっくに終わっているのに，いまだにその脅威にさらされて生活している人がいるというのも，考えさせられます。彼らにとっては戦争の脅威はずっと続いているのです。

【 トンレサップ湖 】

湖上集落を横目にボートクルージング

生い茂る森の中をカヌーで移動。非常にゆったりとした心地よい空間。カヌーのかすかな揺らぎと木漏れ日が眠気を誘います

カンボジアの中央部には雨期と乾季で３倍くらい大きさの変わるトンレサップ湖という湖があります。８月９月は雨期真っ只中。この湖は今まさにどんどんと大きくなっている最中です。そんな湖と共存する人々の生活風景を眺めながら，ボートでクルージングやカヌーを楽しみました。非常に多種・多様な生態系を有し，変化に富むこの湖ですが，難しい話はおいといて，ゆらゆらと揺られながら気持ちの良いひと時を過ごしました。

【 アンコールワット 】

私はホテルでお留守番をしていたので，様子は見ていませんが，皆それぞれに楽しんだようです。

【 マーケット 】

マーケットでのお買い物も旅の醍醐味の一つ。値段表示のない，現地での適正価格もわからない商品を店員と値段交渉をしながら購入します。あの手この手でぼったくろうとする店員と根競べしながら，それでもやはりぼったくられて悔しい思いをした人が何人もいました。店員との（姑息な？）やり取りも含め，いろんな意味で楽しめたようです。

【 最後に 】

最後に，今回の参加者はほとんどが大学生。小学生や社会人の方もおられましたが，大きくまとめるとごくごく普通の若者たち。このスタディ・ツアーに求めるものも様々で，感じ取ったものもまた様々だったと思います。いずれにせよ，一歩外（海外）に出て，自分とは全く異なった価値観や風習，境遇に触れることは，それそのものを知ることができるだけでなく，それを通して改めて自分自身を見つめなおすいいきっかけになるように思います。今回のツアーが，各々の人生の新たなステップにつながることを期待しております。

文責：曽田実